

緑色の濁ったお茶
あるいは幸福の散歩道

山本昌代

緑色の濁^{にご}ったお茶
あるいは幸福の散歩道

山本昌代

河出書房新社

緑色の濁ったお茶
あるいは幸福の散歩道

一九九四年一〇月二一日 初版印刷
一九九四年一〇月二〇日 初版発行

著者 山本昌代

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

〒150 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-32-12
電話 〇三-三四〇四-1201 営業
〇三-三四〇四-1861 編集
振替 〇〇-100071-0802

印刷 大日本印刷

製本 加藤製本

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

©1994 Printed in Japan
ISBN4-309-00938-7

山本昌代(やまもとまさよ)
一九六〇年、横浜に生まれる。津田塾大学在学中の八三年、「応為坦坦録」で第二〇回文藝賞受賞。他に『文七殺し』『江戸役者異聞』『源内先生舟出祝』『善知鳥』『デンデラ野』『居酒屋ゆうれい』(いずれも河出書房新社刊)『き人伝』(集英社刊)がある。

緑色の濁ったお茶

あるいは幸福の散歩道

装画 茨木貴乃
装丁 中島かほる

歩行のための秘薬——それは、河柳三両、人參二両、白龍腦一両、熊胆二匁五分、
以上を練り丸薬としたものである。

歩行の最中に、朝夕五〜七粒ずつ服用する。

冬は五、六里毎に五粒、夏場は七、八里で五粒ずつ口に含む。

日に何千里という距離を、飛ぶような速さで歩き、疲れを知らない神足歩行術と呼ばれるものは、その昔、天狗の技としても伝えられた。

聞くところによれば、修験道とも伊賀や甲賀の忍者たちの術とも、関連があるという。

浦賀に黒船のあらわれた頃まで、というから、つまりつい最近まで、どちらかといえば闇の領域に属する人間たちの間で、師から弟子へ、父から子へと受け継がれた。新幹線や高速道路が整備された現代に、神足歩行術は存在するだろうか。

誰かが純粹な愉しみのために、習うということはあり得るけれども。

伊勢の商家に生まれた竹川竹斎という人が、この術について書き記している。

竹斎は勝海舟の後援者として、また『海防護国論』の著者として、名を残した人である。

近江商人と伊賀甲賀の忍者の間には関係があるといわれ、伊勢の豪商に生まれたために、竹斎は術を身につけたらしい。

望まれて人に教えたが、弟子の多くは武士階級であつたという。

さて、その歩行術の内容は、というと、これが至極単純で、文字で表わすと、拍子

抜けのするほどのものである。

まず基本として、臍（丹田）に気を納める。首筋、腹、足の先までの凝りを解き、肩の力を抜き、全身に気を滞らせないこと。

そして、腰の間を弛め、次に、股、膝を弛め、さらに足の先を弛める。

全身を弛め、はじめの一里はゆっくりと歩く。

体全体の調子が整い、足が軽みを感じ始めたところで速度を上げていく。

腰、脚の回転をなめらかに持続させるのが肝要である。

坂道を上る時、下る時、砂利道を行く時、風の強い時、歩き方は場合によりそれぞれである。

平地を歩く時は、サササザザ、オイトシヨという。

登り坂には、マダマダマダマダと呟く。

装身具については、特別のものは指定されないようである。

たとえば魔法のサンダルのような類は、使われた様子がない。

冬の午後の淡い日射しが、部屋の中を満たしていた。

新調して間もないこたつに坐り、鱈子さんは雑誌を繰っていた。

某化粧品メーカーのPR誌で、「玉椿」という。

神足歩行術についての記事は、「ニッポニアニッポン草子」と題された、連載エッセイの中にあつた。

紋つきの羽織に、刀をさした竹川竹斎の写真が、隅の方に小さく出ていた。

「商家の人には見えないわ。どう見ても侍の恰好だわ」

竹斎は生涯、勝海舟に好意を持ち、新しい日本の行方にも関心を抱き続けたが、本業においては、報われるところは少なかったようである。

製茶、製陶などにも手を出したものの、成功はしなかった。

財産をなくし、田舎に退き、ちゃんまげを切り、ズボンをはいて、歩くことをやめなかった。

最初の妻を若くして病気で失い、後妻とは永く睦まじかった。

夢と理想ばかりを追いかけて、何ひとつ実るところのなかった一生を、自嘲する夫に、

「わたしは田舎を自由に、歩き回り走り回っているあなたと共にいるのが好き」

と、彼女は微笑んだという。

「夫婦仲のいいのはいいことね。それが一番いいわね」

こたつの向かいでは、姉の可李子が編みものをしている。

「その人、いくつまで生きたの」

訊かれて、鱧子さんは写真の横のプロフィールに目をやった。

「二八〇九―一八八二、というから、七十三歳」

「子供はいたの」

「最初の人の男の子がひとり」

「肩が凝っちゃった」

可李子がぐると、首を回した。

三階建てで九世帯のおさまった集合住宅の、ここは一階の角である。

窓の外には芝生が広がり、その向こうを一本の細い道が横切っている。

道の向こうは公園である。子供の遊ぶための滑り台や、浅く造られたプールもあるが、それらは少し離れた場所にあり、鱈子さんたちの住む部屋の窓からは見えない。

細かい砂利を敷きつめたような白い空地と、正面に数本、高い銀杏の樹が見える。

銀杏の樹の下には、ペンキで紅く塗られたベンチがひとつ置かれ、そこに代わるがわるいろいろな人たちが腰を下ろしていくのが、窓のこちら側から、小さな風景として眺められた。

銀杏はすこやかで、毎年秋になると鮮やかな黄金の衣裳をまとう。

今は裸でそのためにベンチの色がひととき目立つ。

時計がポーンポーンと、二時を打った。

こたつ布団の裾で、可李子の編む毛糸の玉がおとなしく動いている。今年六十になる母親のために、カーディガンを編んでいるのだった。

つい三日ほど前、手芸用品店に出かけて毛糸を買って来たのである。

寒い季節に気分が華やぐようと、少しくすんだ若草色の毛糸を選んだ。

「合わせるものがむずかしいわね。それに少し若向き過ぎやしないかしら」

母親は毛糸を見て言ったが、可李子は構わずに編み出した。

昼食をとったあとの午睡が習慣になっている母親は、今、隣の部屋のベッドで眠っている。

「猫がいたらじゃれつくかな」

鱈子さんは毛糸の玉を見て、ふと思いついたようにいった。

「猫が欲しいわね」

「規則で飼えないわよ」

可李子は答えたが、小型犬や猫といった温かそうな獣は、やはり飼ってみたかった。

「ヨークシャーテリアが欲しいわ。この間ペットショップのショウウィンドウで見たの、バスの中から。店の人にあまえてピョンピョン跳ねてたわよ」

鱈子さんは顔を上げて、可李子の方を見た。

何かを思い出そうとするようだった。

「ヨークシャーテリアって、茶色っぽい犬？ よく赤いリボンを結んでいる」

「そう」

ヨークシャーテリアはリボンを結んでもらえるが、他の、たとえばシェパード犬などは、なぜリボンをつけてもらえないのか、鱈子さんはそれを可李子に訊こうかと迷って、やめた。

ああ、毛が短いから、リボンが結べないのだとわかった。

「絶対マゾだよな」

「典型的な被虐性患者だって、お父さんがいった」

「見てるとムカムカしてくる」

窓の外に目をやると、さつきまで誰もいなかった公園のベンチに、制服を着た学生が三、四人集まっている。

中学生か高校生かわからない。どれも男子生徒だった。みな、背が高く、体が細かった。

ポケットに手を入れたり、指で髪を掻き分けたりするのが、どこかせわしなげだった。彼らの話し声が、聞こえたような気がした。

「殺してやろうか」

「喜ぶんじゃないかな、マゾなら」

何の相談をしているのだろうと、鱈子さんは目を凝らした。すると少年たちのうちの一人がこちらを見た。

「いやね」

「どうしたの」

可李子が尋ねた。

「あの学生たち、こっちを見てるわ」

「気のせいよ」

「人殺しの相談をしてるのよ」

「そう」

「早く死ねばいいのにな」

「何かいった？」

「わたしは何もいわない」

姉さんには聞こえないのかしら、と鱈子さんは不思議がった。

ほんとうは聞こえてるんじゃないかしら。

「この人の奥さんという人がね、ちょっとすてきな人なのよ」

少し経つと、鱈子さんは公園の学生たちのことは忘れてしまい、雑誌の記事に関心

を戻していた。

「誰の奥さん」

と可李子が訊いてくる。

「この竹斎という人の、二度目の奥さんよ」

「どこが」

「今は文明開化だと、世間は騒いでいるけれど、歩くことの大切さに、今にみんながきつと気づく時が来るって、そう御主人を励ましたんですって」

神足歩行術とは、厳密にいうなら、より速く歩くことを追求した術であり、速歩技術である。

つまり、歩くこと、それ自体を窮めた術とはいいいにくい。

歩くこと、純粹にただ歩くということ突きつめていくと、速歩法とは逆の方向に心は向かうのではないだろうか、と鱈子さんは考えた。

できるだけのんびりと、緩やかに歩く方にある。

その方が、より深く自然と関わることができるからだ。

関わるという言葉では、少し意味がずれてしまうかもしれない。

自分という個と、自然との境界が、可能な限り稀薄になること——歩くことの歓びは、そんなところにあるのではないかと、想像した。

鱧子さんの足は、歩くという動作をしない。

幼い頃からの病気で、筋肉がほとんど機能しなかった。

何級かの等級分けのある身体障害者手帳は一級、つまり最重度の扱いである。

手帳は、何がしかの福祉事業の恩恵を被ることができるための、身分証明書のようなもので、顔写真と、本人の生年月日、それに黒い大きな文字で病名が記されている。

鱧子さんのそれは、バリリロロニ四肢機能全廃、とある。

イタリアの酒のような名前だが、そうではなく、これはバリリさんとロロニさんという二人の医学者が研究をした病気であるという意味である。

この二人がどこの国のかは、鱧子さんは知らない。